

<b>Title</b>	北朝鮮軍の現状：金正日から金正恩への後継過程での問題
<b>Author(s)</b>	宮本, 悟
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.53 別冊, 2012.3 : 86-93
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4251">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4251</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 北朝鮮軍の現状

——金正日から金正恩への後継過程での問題——

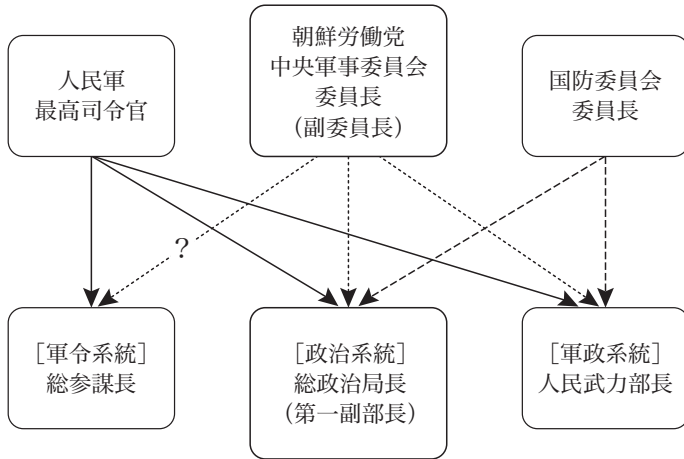
宮 本 悟

### 1. 金正恩は軍隊を統制しているのか？

金正日から金正恩への継承過程で、金正恩が軍隊を統制できない可能性があるという意見があった。たしかに、二〇一一年二月一七日に金正日が死去した時点で、金正恩が軍隊を統制する地位は朝鮮労働党中央軍事委員会副委員長でしかなかった。国防委員会委員長や人民軍最高司令官の地位は空席となり、そのため軍隊を統制できないという意見が上がったと思われる。しかし、朝鮮労働党中央軍事委員会副委員長では統制できないという根拠が示されたことはない。

ただし、金正日の追悼期間が終了した翌日である二月三〇日に朝鮮労働党中央委員会政治局で金正恩を人民軍最高司令官に奉じることになったので、やはり朝鮮労働党中央軍事委員会副委員長だけでは軍隊を統制するのに問題があったと考えられる。では、どういう問題があったのかを考察してみたい。まず命令系統を地位別に簡略化して見てみよう。軍令系統は指揮統制権、政治系統は教育や宣伝、監視など、軍政系統は日常業務に関する命令系統である。

図1. 朝鮮人民軍の命令系統略図



A. 国防委員会委員長は軍令系統に命令できるように  
なっていない。

B. 朝鮮労働党中央軍事委員会委員長はすべてに命令  
できるが、軍令系統に関しては確実な例がない。

C. 人民軍最高司令官はすべてに命令できるし、実例  
が多い。

朝鮮労働党中央軍事委員会委員長は空席になった  
が、朝鮮労働党中央軍事委員会は委員会の名義で命令  
書（決定書）を発行するのである。副委員長で  
も命令できるはずである。しかし、朝鮮労働党中央軍  
事委員会名義で軍令系統の命令を発した実例が見つ  
かていない（動員令など）。すなわち、人民軍最高  
司令官が空席だと軍令系統に命令できるかどうか不  
明になる問題があった。そのため、金正恩は可能な限  
り早く人民軍最高司令官の地位につく必要があつた  
といえよう。

## 2. 朝鮮労働党が軍隊を統制しているのか、軍隊が朝鮮労働党を統制しているのか？

朝鮮労働党が軍隊を統制しているのではなく、軍隊が朝鮮労働党を統制しているという意見が時々見られる。たしかに北朝鮮社会において軍人の社会的地位は高い。しかし、北朝鮮では、朝鮮人民軍は朝鮮労働党の軍隊であると規定されている。すなわち、朝鮮労働党が朝鮮人民軍を統制しており、軍隊の人事は朝鮮労働党によって決められていることになっている。金正恩が朝鮮労働党中央委員会政治局で人民軍最高司令官に奉じられたのを見ても、朝鮮労働党によって朝鮮人民軍が統制されていることを理解できるはずである。

もし、朝鮮人民軍が朝鮮労働党を統制しているのであれば、朝鮮労働党の人事は朝鮮人民軍によって決められているはずである。しかも、軍人は軍階級（軍事称号）によって軍隊内の序列が決まっているので、朝鮮人民軍が朝鮮労働党を統制しているのであれば、少なくとも軍人は軍階級に沿って、党内での序列が決まっているはずである。軍隊では階級が下のものが、階級が上のものよりも上位の地位につくことは許されないからである。実際にそうかを検討してみた。

### A. 党中央軍事委員会の序列（カッコ内は軍階級）〔二〇二二年二月二五日時点〕

副委員長

金正恩（大將）、李英鎬（次帥）

委員

(カナダラ順)

金永春 (次帥)、金正角 (次帥)、金明国 (大将)、金京玉 (大将)、キム・ウォンホン (大将)、鄭明道 (大将)、李炳鉄 (大将)、崔富日 (大将)、キム・ヨン Chol (上将)、尹正麟 (大将)、朱奎昌 (なし)、崔相旅 (上将)、チェ・ギヨンソン (上将)、禹東則 (大将)、崔竜海 (大将)、張成沢 (大将)

※金正恩と金永春の関係を見れば、党中央軍事委員会内の序列は軍階級に沿っていない。

B. 軍階級の序列 (カッコ内は党の職位、番号は党内の序列)

人民軍元帥…④李乙雪 (党中央委員会委員)

人民軍次帥…①李英鎬 (党中央委員会政治局常務委員、党中央軍事委員会副委員長) ②金永春 (党中央委員会政

治局委員、党中央軍事委員会委員)、③李勇武 (党中央委員会政治局委員)、全載善 (なし、次帥が

まだあるかも不明)、李夏一 (なし、次帥がまだあるかも不明)、金鎰喆 (なし、次帥がまだあるか

も不明)

※李乙雪を見れば、軍階級によって党の序列が決まっていない。

以上から、軍階級によって党の序列が決まっているのではないことが分かる。それは、朝鮮人民軍が朝鮮労働党を統制しているのではないことを意味する。やはり朝鮮人民軍は朝鮮労働党の軍隊であり、朝鮮人民軍の軍人は朝鮮労働党

によって地位を決められるのである。このことから、金正恩を人民軍最高司令官に奉じたのが朝鮮労働党中央委員会政治局であることは規定通りの手順であつたことも理解できよう。

### 3. 金正恩は「軍人」を統制しているのか？

金正恩は、軍人を含む朝鮮労働党の指導層や実務官僚に対して自分の意志を押しつけているのか、それとも指導層や実務官僚から上がってきた案件に署名しているだけなのか。それを死去から追悼大会までの手続きを誰が考案したのかで考察してみたい。まず、金日成と金正日の事例を比較してみる（表1）。

金正日の方が葬儀委員の数が少ないことを除けば、哀悼期間や弔問客受け入れ期間、他の行事はほとんど同じである。これは政治的な判断がほとんど入っておらず、金日成の事例をそのまま踏襲して金正日の葬儀を行ったものと考えられる。これは金正恩でも指導層でも、実務官僚でも考えそうなことである。これだけでは金正日の葬儀の手続きを誰が考案したのか分からない。では、唯一異なる葬儀委員の数で、それが金正恩の意志によって考えられたものなのか、その他が考えたものなのかを考察してみる。

金日成の葬儀委員数は二七三名で、金正日の葬儀委員数は二三二名であつた。四一名の差がある。まず、葬儀委員数の割合を出して見る（算式1）。

表1 金日成と金正日の葬儀の比較

比較項目	金日成死去	金正日死去
死亡時刻	1994年7月8日 2:00	2011年12月17日 8:30
死亡公表時刻	1994年7月9日 12:00	2011年12月19日 12:00
死因	心臓血管の動脈硬化症で治療を受けてきた。溜まった精神的な過労によって、7月7日にひどい心筋梗塞が発生し、心臓性ショックが併発した。すぐに全ての治療を行ったにもかかわらず、心臓ショックが悪化した。	心臓及び脳血管疾病によって長い期間、治療を受けてきた。溜まった精神肉体的過労によって走る野戦列車の中で重症急性心筋梗塞が発生し、ひどい心臓性ショックが併発した。発病すぐに全ての救急治療対策を立てたが、死去した。
診断結果	7月9日、病理解剖検査を行い、疾病の診断が完全に確定された。 発表日付：1994年7月9日	12月18日、病理解剖検査を行い、疾病の診断が完全に確定された。 発表日付：2011年12月18日
葬儀委員	272 + 1（+1は後継者）	231 + 1（+1は後継者）
国家葬儀委員会の公報	（1回目）6箇条、公報〔日付：1994年7月8日〕。（2回目）3箇条、公報〔日付：1994年7月15日〕。	7箇条、公報〔日付：2011年12月17日〕
遺体	錦繡山議事堂に丁重に安置	錦繡山記念宮殿に丁重に安置
哀悼期間	7月8日から7月20日（13日間）	12月17日から12月29日（13日間）
弔問客受け入れ	7月11日から18日（8日間）	12月20日から27日（8日間）
永訣式	7月19日、革命の首都平壤で挙行	12月28日、革命の首都平壤で厳粛に挙行
（中央）追悼大会	7月20日、革命の首都平壤で厳粛に挙行	12月29日に挙行
（中央）追悼大会の時刻の行事	平壤市で追悼大会が挙行される時刻に敬愛する首領金日成同志を追慕して、平壤市と各道所在地で弔砲を打ち、全国の全体人民が三分間の黙祷をし、全ての機関車、船舶で一斉に汽笛を鳴らす。	平壤市で中央追悼大会が挙行される時刻に偉大な領導者金正日同志を追慕して、平壤市と各道所在地で弔砲を打ち、全国の全体人民が三分間の黙祷をし、全ての機関車、船舶で一斉に汽笛を鳴らす。

表1 つづき

比較項目	金日成死去	金正日死去
各地方の追悼行事と追悼式	哀悼期間に全国すべての機関、企業所で追悼行事、平壤市の追悼大会の時刻に各道、市、郡で追悼式	哀悼期間に全国すべての機関、企業所で追悼行事、平壤市の中央追悼大会の時刻に各道、市、郡で追悼式
哀悼期間の義務と禁止事項	機関と企業所で弔旗を掲げ、一切の歌舞、遊戯、娯楽を禁止	機関と企業所で弔旗を掲げ、一切の歌舞、遊戯、娯楽を禁止
外国の弔意代表団	受け容れない	受け容れない

算式1

$$232 \text{ (金正日の葬儀委員数)} \div 273 \text{ (金日成の葬儀委員数)} = 0.85 \text{ (0.84982)}$$

算式2

$$25507 \text{ (金正日の生存日)} \div 30035 \text{ (金日成の生存日)} = 0.85 \text{ (0.84924)}$$

金正日の葬儀委員数は、金日成の葬儀委員数の八五％になる。この割合に近い金日成と金正日に関する数字を探ってみたところ、金日成と金正日の享年が最も近かった。さらに正確を期するために、両者の生存日を計算する。

金日成の誕生日（一九一二年四月一五日）から死亡日（一九九四年七月八日）は、三〇〇三五日であつた（誕生日と死亡日を含む）。

金正日の誕生日（一九四二年二月一六日）から死亡日（二〇一一年二月一七日）は、二五五〇七日であつた（誕生日と死亡日を含む）。

その割合は、以下の通りであつた（算式2）。

驚くほど一致する割合である。すなわち、生存日を基準にして葬儀委員数を減らしたと考えられる。このような客観的な数字を使った理由は次のように考えられる。



- ① 金正恩が独断で決められるのであれば、説明責任がないので、このような理由をつける必要はない。
- ② 政治的に批判される可能性が少ない朝鮮労働党の指導層が決めたのであれば、政治的な判断で委員を決められるので、このような客観的な数字を使う必要はない。
- ③ 実務官僚が決めたのであれば、最高指導者や指導層に対する説明責任があり、政治的に批判される可能性があるの  
で、政治的に批判されにくい客観的な根拠を使うであろう。

このことから、葬儀委員の数は、実務官僚によって考案されたと考えられる。ということは、金正恩は必ずしも自分の意志を指導層や実務官僚に押し付けているわけではない。自分の父親の葬儀ですら、自分の意志を示さず、実務官僚に任せていたことになる。そのため、金正恩が自分の意志を軍人に押し付けているとは限らず、むしろ軍人によって提起された案件に署名しているだけの存在である可能性がありといえよう。